古典　『枕草子』　「雪のいと高う降りたるを」　年組番〔　　〕

雪のいと高う降りたるを、a例ならず[1]御格子参りて、[2]炭櫃に火おこして、物語などして集まりb候ふに、「少納言よ。[3]香炉峰の雪cいかならむ。」と仰せらるれば、[4]御格子上げさせて、d御簾を高く上げたれば、笑はせ給ふ。

人々も、「さることは知り、歌などにさへ歌へど、思ひこそ寄らざりつれ。なほこの宮の人には、eさべきなめり。」と言ふ。

1　御格子参りて　「格子」は、寝殿の廂の間と簀子の境にしつらえた、人目や風雨を避ける建具。「御格子参る」には、格子を【1　上げる　】場合と【2　下ろす　】場合とがある。ここは、雪の日は格子を【3　上げて　】外が【4　見える　】ようにするのが普通であるのに、今日はいつもと違って、という文脈なので、「【5　下ろす　】」適切。

2　炭櫃　いろり。

3　香炉峰の雪いかならむ　中国唐代の詩人白居易の詩集『白氏文集』に見える有名な詩句を踏まえた、中宮の問いかけ。

4　御格子上げさせて　【6　筆者　】がそばにいる女房に御格子を上げさせた。